まだ生まれぬ子供達

タカオ

政治には関心ありませんでした。これといった不満はなかったし、出来る事ならばわずらわしいゴタゴタにかかわりたくなかったのです。だからそれには触れもせずにただ黙って今まで生きてきました。ああ……それなのに奴等は僕に触れてきたのです。それも、いつのまにか知らず知らずの内に、狡賢い手口で、真綿で首を絞めるかのように。

僕は1958年2月、埼玉県は秩父市に生まれました。あの革命的な"秩父困民党事件"を御存じの方も多い事と思いますが、それは僕にとって少しばかり自慢の種です。音楽は大好き、特にウディやピートやディランを♪ 愛用のギターはヤマハ。四人兄弟の末っ子で長男。つまり三人の姉達の中で育ちました。両親の扶養問題は今の僕にとって大きな悩みの一つです。

秩父に住む人々は正午の来た事をセメント工場の石灰採掘時の爆音で知る事が出来ます。その爆音は、四方八方の山々にこだまして思わず耳を覆う程の大きさです。人口6万人あまりの山に囲まれた小さな盆地の街は、セメント工場の灰塵でネズミ色に染まり、空までもが被われています。ダイナマイトで崩され削り取られた秩父のシンボルである武甲山は見るも無惨な姿を曝しながら今も爆音に身を震わせています。

困民党とセメントの街、秩父に18の時まで暮らし、その後2年間東京で過ごした後、昨年5月に旅に出て今に至っています。10月初旬寒むくなり始めた北海道を後にして沖縄に向けて南下する途中、ふとしたきっ掛けからコミューンとしての無我利道場を知り、奄美に留まることにしました。それまでは沖縄で砂糖キビ刈りでもして冬を越そうと考えていました。そんな僕の事ですから、ここに来るまで枝手久斗争の事等これっぽっちも知らなかったし、又知ろうともしませんでした。地域斗争と無我利とのかかわり会いを知らなかった事が、かえってこの僕を何の先入感もなしにこの道場に出向かせるようにしたのかもしれません。

11月10日に無我利道場へ来てからいつのまにか3ヵ月が過ぎようとしています。20年間ぬるま湯のような生活に浸りきっていた僕にとってここでの生活はとても多くの事を考える チャンスを与えてくれました。僕も差別された多くの人々（山谷労働者、被差別部落民、アイヌ民族等を始め、アジア、南アメリカの人々等も含め）の上に成り立っ

ていたし、又同時に僕自身権力側に縛られ操られてきたのです。今まで生きてきた20年間がすべて無駄とは云わないまでも、ここでの生活は僕に学ぶべき重みのある生き方を教えてくれました。そして、その中で今僕自身が変りつつある事が実感としてわかってきました。

政治的知識や関心のまるでなかった僕がみんなの話しの輪の中に入って行くには少なからずぶつからなければならない壁というものがありましたが、それはたいした問題ではありませんでした。わからないながらも自分としての意見は云ってきたつもりだし、又それを聞いてもくれました。それぞれ育った環境も、考えも、生き方もちがった人間が毎日顔を突き合わせて生きて行くのですから、感情的な葛藤もあって当然です。その中でお互いの持ち味を認め合い力として行くのがコミューンであり、無我利なのです。無我利から我がぬけたならただの無理になってしまうのです。　ただポンやダマリのあまりに楽観的なユートピア(革命)指向にはついて行けないと思えたし、首をかしげる所もありました。それ(楽観主義)は僕にも云える事なのでなおのこと強く感じたのです。でもその疑問がとけるのにそうたいした時間はかかりませんでした。ポンもダマリもヤマハボイコット運動の敗北を経験していたし、今は又東燃石油備蓄問題、そしてその背後に控えるプルトニウムというとてつもないバケモノに立ち向っているのです。そういった事を把握した上で僕達一人一人が楽観的であるならばそれも又大きな原動力になりえることは云うまでもありません。

日常生活の面においてもインスタント、ワンタッチ、全自動等超合理的、非創造的な文明社会に馴らされてきた僕にとっては意識的な問題よりも身にしみて自分自身の無力さを感じざるをえませんでした。　どうしたらつかつかのパンやおいしいアップル・パイが焼けるか、山のような汚れ物をきれいに洗えるか、無農薬野菜を大きく育てられるか、こやしをバランスよく担ぎ運べるか、アブリ網を力強く引けるか、魚を手早く上手にさばけるか、切れ味よく包丁を研げるか、ノコやカナヅチをうまく使いこなせるか等……例を上げれば切りの無い程身につけるべき事柄はあったし、又知らない事を学ぶのは僕にとってとても楽しいことでした。これからもまだまだ覚えなければならない事がたくさんありますが、その中に僕自身の知恵や工夫が生かせるようがんばって行きたいと思います。

1978年もおしつまった12月22日、元気者だった安良うじが入浴中に亡くなりました。今まで死体なんて見たことも、触ったことも、嗅いだことも、味わったこともなかったこの僕がその死体に接ぷんするはめになろうとは思いもよらないショッキングな出来事でした。あの唇の生あたたかさ、ザラザラしたヒゲの感触、あの異様(らっきょうの様)な口臭を今でも忘れることは出来ません。　その日の夕方知らせを聞いてかけつけた時には、もうすでに脈もなく心臓も止まっていましたが、わずかばかりの可能性を信じて医者が来るまでの2時間あまり、3人がかりで必死の人工呼吸(マウス・トゥ・マウス)を試みました。しかし安良うじが再び息を吹きかえすことはありませんでした。その日の朝、あいさつを交したじいさんが、その日の夕方にはもう帰らぬ人となっているのです。ほんの一瞬を界にして命ある肉体がただの肉の固まりに変ってしまうのです。あまりにあたりまえなこの事実を僕はそれまで忘れかけていました。核家族化が進んだ現代の社会において人間の死というものにふれる機会はますます少なくなっています。ペットを飼うことも出来ない都会の子供達にはなおさらそれは遠い世界での出来事としか写らなくなるでしょう。僕達は死という大前提の上にある事を決っして忘れることは出来ません。死はいつの時でも生きて行く事と共についてまわっているのです。

人を殺すって云う事はなんて人間的なんだろう……
毎晩徹夜で勉強して一流大学へ行くよりも
毎朝ヒゲを剃ってネクタイ締めて満員電車に揺られるよりも
毎朝40分間鏡の前で化粧して流行(ハヤリ)のかっこするよりも
最も人間的なこと……殺人!
犬や猫だって徒党を組んで弱い者をいじめ殺したりはしない
同じ種族、仲間同志で殺し合うなんて人間くらいなもの
こん棒でナイフで、弓矢でピストルで、大砲でミサイルで、地獄の大王プルトニウムで!

無我利の仲間達は漁協資格審査会において『それでも人間か?』等という理由において加入を拒否されました。人間と動物とを別け隔てるそのことこそ大きな思い上がりです。限りあるこの地球の上で僕達はお互いにたすけ合って生きて行かなければなりません。海や大地からのお零(ヨボ)れにすがって生きている僕達に『それでも人間か?』と云うのなら僕達もあなた方に問います。『それでも動物なのか?』と!

ジェット機が空を飛び原子力船が海を行きかい、新幹線が早く走れば走るほど僕達の心は同じ早さで悪い方へ悪い方へと進んで行くような気がしてなりません。　母なる海は石油水銀、有機廃棄物で汚され、生なる大地は農薬でひびわれ、ブルトーザーで削られ、ダイナマイトで崩されています。私利私欲に捕われた金のこ者達はこの地球と人間とを切り売りしようとしています。ほんとうに壊されているのは僕達の心なのです。そして今僕達は自然からの強烈なしっぺ返しを受けています。指の無い子供、目の無い子供、脳の無い

子供、増えつづける異常な自然現象。ありとあらゆる不安が僕達の囲りをとりまいています。これは自然界(地球、宇宙)からの警告にほかなりません。今こそその答をだす時が来たのです。

私はいつもあなたのそばにいます
三里塚に 狭山に 水俣に 枝手久に
あなたと共に歩みたいのです
集会やデモはかかしません
余裕があるならカンパもおしみません
出来る限りの力になります
私はいつもあなたのそばにいます
あなたと共に歩みたいのです
　ああ でも……でも
　それだけは云わないで
　ああ それだけは云わないでおくれ
　『ここに来て一緒にやろうよ』なんて

もしあなたに田舎(フルサト)があるのなら今すぐそこに帰った方がいいでしょう。もしあなたに帰る所がないのなら、どこか行くべき所をさがすのもいいでしょう。地方は過疎で頭を抱え、都会は過密で悩んでいます。あなたが求めるならば行くべき所は目の前にあるのです。僕も枝手久斗争の終りを見とどけるまでここに暮らすつもりです。その先のことはわかりません。

僕は永い間人生のマスターキーを探していたような気がします。でもそんなもの始めからありはしなかったのです。人生の扉なんてハンマーで打ち壊し囲りの壁でさえもこなごなに叩き崩さなければなりません。そこから新しい第一歩が始まるのです。そして僕達は維摩やひかりや宇摩や万葉やまだ生まれぬ子供達の為に美しく、又醜いこの残された自然を守らなければなりません。それが僕達に枷(カセ)られた人生の課題なのです。

――ヤポネシア紀元 40079年2月――

「オーみんなオフロいけたよ」ギャー

（鈴木正昭）

ある朝寝床から目を覚まして起きようとした時、どうも精神状態がおかしいのに気付いた。前から精神状態などおかしいとは思っていたがどうもそれとは違うのだ。いつもなら「ようし。。してやろう。」とかいって起きるのだが今日に限ってそれができない。ポンがすでに起きているのがわかる。おれは，ずーっとポンと張り合って「オレだって。」って気持ちでやっていた。ところがどうだ，今日もし起きるとしたらこいつあもうドッチラケの気分以外にありえないんだ。最も，おいらが恐れていた事！誰かに，「アイツはシラケている。」と感づかれてしまうこと。そいつをモロ出しにするしか起きてみんなと顔を合わせ共に生活することができなくなった。今まで自分だけの悟りを求めていた故に，今までどうもみんなとシックリいかなかった。自分を見せかけようとしていたからなんだ。なんと大それたことに神様に。そのような悟りなんてどこにもありはしない。人と人とのふれ合う喜こびなら行る。

自分の影におびえている人間は自分を見せかけることにのみ神経をとがらす。そのような事では話しをする事すらできなくなってしまう。例えば部落のカメおばちゃんちでごちそうになるというようにゲッコウいい思いをしていたのにぬけがけをしているという思いでいいことと思おうとしなかった故に，それに気をとられていたりして・・・を隠すことで この事は一斉が権力というひとつの型にあてはめてしまう思考のせいだとわからざるを得なくなった。自分というものをまわりの目から見たとしたらどのようになるかでする行為は劣等感，優越感，というひとりよがりだ。例えば個人の事として「公害反対。」をしている優越感に浸って賛成派は全て敵だ、とばかり頭ごなしの決め付けは共に手をとり，闇からべき相手を間違っているし，あるいは公害企業に加担している自分とは東京の山の手に住む両親から生まれたという劣等意識は，「公害反対」をするという免罪符という名の逃げ道，という落とし穴へと落ち込みました。これらのことはそのどちらも軍隊の経験から無意識のうちに身につけてしまった親父の暴力というゴリ押しと，オフクロのベッタベタのひとり息子への甘やかしと性に対するタブー視によってで、そんな親父に対する反発と，オフクロへの甘える気持ちと自分の行動にあてはまらない故の迷いという事により成り立っている家族制度から全く抜けていなかったということである。このような関係こそ日本国家を支える硬っ苦しいひとつの型のみを重視してしまう やり方につながっている。ある日，久志部落のカネジロウおぢの畑へニンニクの間引きを手伝いに行った時，「名瀬へ持っていけば高く売れるなあ。」という言葉に73に成っても，畑仕事のような重労働をしているジイさんバアさんたち。その言葉の中に含まれる共同体の衰退，それをもたらした中央集権その結果としての中央志向の実体。だがここで重大なのはその時，手伝っているという事で「何か役に立っている。」という錯覚はなかったか？という事。「このままでは部落は無くなってしまう。」という同情では，賛成派も同じ心配故に騙されている資本の論理をたくみに利用した

自己主張でしかないのだ！　長い目でものを見ないその場限りの損得勘定で物事を決める資本主義的生き方を知らず知らずの内に身につけてしまったからだ。今、想えば親孝行を考える事だけが大切なことではない、イヤそんな事は考える必要ないのだ。その考えに固執していたおかげでずいぶん無茶な間違いをしていたものだ。ムガリの仲間たちに親からの手紙を見せたら、「もっと甘やかしてあげなさいよ。」と言われた。過去の事象にこだわり過ぎた結果が、このように単純なゲームを複雑なもののようにしてしまっている。高い所へは水は流れない。自然な死すら妙な力により不自然にされてるものの多い事。自然と頭が下がるのは腰の低い人、そしてシマンチュウのほとんどがそれに当てはまり、傷つくべき何ものも持たない強さからか、ほんとに楽しいことを知ってるからか、権力をかさに着た人間に対し一歩も主張をゆずらない。身のまわりに起きた事にとらわれ断えずそのようなとらわれから脱出をしようとまわりには益々、自分勝手な悪あがきをしているという考え方及び行動を自己中心という。そのように、物事をまわりの人々に合わせる生き方は途切れることなく過去にしか目を向けていず、決してそれを解決する事ではないし、勿論未来へ向いてるのでもないのであるが、一担、自分はとらわれから行為しているのであるか考えてみると糸口が出てくる事があるのである。自己中心トリップに落ち込んでいる人には、よく分る話しだと思う。そのような見方で原コーを書いている。まだまだ行ってみよう。　おチョウシ者で通っていた僕は、その仮面というイヤイヤつけた物を、いつしか自分として見るようになり高校を卒業すると山小屋のアルバイトの仕事を点々とする内に身につけざる得なくなった春歌をアブリ漁に賛加する大勢の漁仲間の中でやってしまっていた。海において性の話しをする事や、メンスの事、は"不浄"と男みな嫌われているのだという言い伝え、を無視し歌える立場に居た僕に、春英さんは言い伝えを重んじている人たちの事を想って、僕の無責任な態度をただひと言ムロアジ散ったよと言われた時の自分自身の、バカさ加減にあきれ果てたものだった。そして、そのような弱い意志を認め合ってきた社会に腹が立つのだが個人的な怨みなど1円の値打ちもない。これがもし何気なしに歌っていたのなら、どうなっていただろう？だがこのことは問うまい。　話し変わって、昨年の公害反対大運動会に於いてたったひとつのとり得としていた応援団の優勝も、これ立、他の種目、では勝ち目、ないという事を見越しての一点突破の成果(?)であった。僕個人も同じようなところでとり得とてこれ無いが、ひとつ覚えのギター片手にひるがえる黒マントをなびかせて「東燃死刑」の長柄鎌を片手にドクロ仮面よろしく地獄のエンマだか死神だかを必死になって演じたがジィちゃんバアちゃんたちの乗ってるんだか乗ってないんだか、さっぱりケントウがつかないで益々我無斜裸、にやってはみてもいつでも乗ってる人に乗せようとしたらシケケちゃうばかりでなく、失礼に当たる。ーというようなことが自己中心的である故、　わからなかったという話し。

ではその場のスターとしてきどっているポーズなどを
どうかお見のがしなく

ムがりに来てから始めて，いろいろな闘争の話しを聞いたり、自分から本を読みあさってはひとりで勝手に，個人的な思いを噛みしめ，それと当てはめる事によって自分も例えば水俣病の患者のひとりにでもなったつもりに成って涙を流しては，ああ僕はこんなにも苦しみ又権力に対する怒りを貯わえているなどというセンチメンタリズムに浸ったりもしたが、そのような"自己中心的な理解"はあくまでも，権力とは外にある"この身"に危害を及ぼす暴力や態度や型などに現われてくるカと思っていた。そのような頭の中だけの勉強から権力のやり方が解ったつもりの有頂点に当てはまる自分を出したいと思っていた矢先の平田公民館。運よく賛成派の代表格とおぼしき漁協理事らが，村の行政ヲ解事をとりに来るというので勇んで出ていった会場は正に興フのるつぼ，と思ったのは僕のような悪乗り派だけだと思う。実際オバチャン達は漁協組合長が言いのがれをするたびに「そらシッポつかまえた。」と大喜こびではあったが真剣に自分らの将来を考える人には余計な事であったろう。その事がハッキリしたのは，橋口さんが理詰めで組合長を説得している時に彼の事を信頼してないぞとばかり、大声で"逃げようとする"組合長を圧倒的な数の上での優利さとその場のふん囲気につられて頭ごなしに侮辱した。その後春英さんが僕の目を見ながら「村長は、ここへ来ると，殺されてしまうと思っているそうですが，そのような事は，誰もしません。納得のいく迄，いっしょに話し合おう。」という正々堂々と確信を持った言葉を聞いた時，僕は，その言葉が僕に対してであり自分が村長に、あるいは東燃に，あるいは大和独占資本に，そしてその背後にひそんでいる米帝国主義者の側に立っているのを感じた。彼に気に入られると思ってした事が実は、気に入られたいという裏っ返しの結局自己中心から出たオソマツな思い上がりでしかあり得なくいつの間にか、山下春英教という新興宗教の信者になってしまっていたのだ。

いつまでも果てしのない，恐怖心をさまようのはやめよう。
そのかわり果てしなく旅を続けよう！

当り前のキミと当り前のボク

手記1　自分をよく見せる為に行き当たりばったりその場限りの事だけに尻ぬぐいをやってきた。それらは差別する自分をごま化すだけでなく、差別を益々生み出す事でしかない。その事がここ奄美に来て始めて日本人としての自分の立っている立場がはっきりした。差別の実体を背負った自分，そして地球の生命が危ないことの実感を，母国と呼ばれている日本の，世界発展途上国と呼ばれているような地域への公害を輸出するという情ない現状を知っては全く何処へも行けなくなっているのに気付くより仕カナシ。

手記2　今まで真底，自分の想いにより公害反対を叫び，石油基地誘致に反対を唱え，コカ・コーラを拒否することを飲まない事実を誇ってはいなかったか？つまり別の言葉で言うなら"これらの行ないにより，自分を見せかける。"というような"絶対"を求めていたのではないのか！という事は自分は弱い人間だからという妄想にとりつかれ意志薄弱

を装おっていたのではないのか？　何の為に！　ヒッピーハッピー楽して暮らせ。　ではヒッピーとは本当に楽か？いな。ちょっとやったら飽きてしまう。それは信念という展望が横っちょを向いてる故に，熱がさめてしまうのであり，それは信念が定まらないという事である。　ただ単に一個の生命現象として資本主義のオモチャとして生きながらえるのであれば、死んだ方が、マシだ！　つけ加えて言うなら70年安保の時は，展望あるいは理論がない，あるいは自分が傷つかないところで理論を逆方向へ向けて共に手を取り闘うべき者へ熱を発散するという全く体制にとって、痛くも痒くもないばかりか，都合のいい場所であるバリケードの中に身を置いていた。　そして今やっと，わずかながらだが，僕ひとりが入り込むのに充分な展望が開けてきた。　迷いの大きさ故ともすれば投げやりになりがちだが，経験というウッとうしい殻を脱ぎ捨てて信念そのものの固まりになろう。それ以外に道なしだ。先輩を，親を，兄弟を，友達を，権威とするのでなく共に闘ってゆく仲間と見るのだ。

手記3　始めて出たアブリ漁は、僕の経験していたそれ迄のサラリーマンのような決められた仕事をイヤイヤとしていた漁師とは全然違っていた。　まだ漁師という仕事を始める前に，ひとりで思い描いていた漁師のイメージである一人一人の明るい語らいが、いくらでも楽しくなる仕事としてアブリの仕事にあてはまった事。　夕焼けの雲とコバルトブルーが重なりエラブチャの模様のようになっている海へ，ある時は，銀色に輝き通っているすじ雲と抜けるような真青な空へ，そして，ある時は体の中をさざめく真っ赤な血潮の海である水平線へ　毎日、毎日、出漁だ。　一番，話しがはずむひとときがある。とれたてのムロアジを刺身にさばいて、クシュ(トウガラシ)，酢，正油につけて食べながら，焼酎を飲むときである。　南方へ行って通訳をしながら土人とつき合い，親切にされた想い出を語る久志部落のヌビウじは，島グチ(島言葉)に馴れていない僕に，「ジャーくん，人間は皆いっしょ同ンなじ。　言葉が違うだけですよ。」と語る。　その言葉を想い出しながらいろんな人と付き合ってゆこう。　僕のアブリ漁への参加の動機は，魚里人1号を読んで，「何ンだか、自分の抱えている問題を，解決する糸口がありそうだ。」と思って来た何度目かのムガリで漁師をしていたから役に立てばみたいな気持ちで，それと共に別れた彼女にお金を稼いでなどと思って来たものであるが，それが漁始めにまず獲れた魚を地元の賛成派反対派問わず地域の発展を願う故の直接販売に出て客としてのひとりひとりの人間とふれ合った時の，自分のちっぽけな悩みなど抜け切ってしまっている気分を味わったことがこれからもおっていきたいと思った原因だと思う。

小笠原の流木風呂　北海道の牧場のはずれの一軒家のかまどの火のある家の女性からほうの葉にくるんだおにぎり　秋の朝日連峰に流れる前の冬の雪渓の水　笠取小屋の雪の中で見た火　長野のコミューンの山奥のいろり端の火　雪の大峯山中の凍てついたマキ　屋久島の豊富な薪　西表の五エ門風呂の火　波照間島の星砂のサンゴ礁で獲ったカワハギ
そして今，ここムガリの風呂の火を見ている

えだてく島のカエルはトーネントーネントーネンクルナ！と啼くなア
子供の頃，海岸ぱたの一軒家にかぶと虫せみかなぶんとんぼ蛾などが電灯に吸い寄せられては掴まえる興ブンを思い出した。 オヤジに連れられほんの数日夏休みを過ごした時の事である。 その頃までは東京にも6月の終わりになるとニイニイゼミが桜の木にゆって来る周期があって「チーッ チーッ」という鳴き声を聞くと学校の勉強などほったらかして夢中になってそいつを追いかけまわしたものだ どうでもいいとこでするどうでもいいことは悪いことだ どうでもいいところでするどうでもいいことはわるいことだ ムガリに来て何ヶ月も経ってるのにずいぶん長い間気持ちが遠い空の下へと飛び続けていたんだなぁ
明日は公害反対のデモンストレイション
俄か1%の可能性でも他者と連ながれる可能性に賭けてみよう。

「オーイみんなおれたよ〜〜」